

紅茶リバイバル !!

最近まで、「アフターヌーンティーは観光客と年配のご婦人方だけがたしなむ古風なしきたりだ」なんて思っていたのですが、変化の兆しが見え始めたようです。近頃のティールームは何週間も前から予約が埋まり、その客層も伝統文化目当ての観光客ではなく、ロンドンの最先端をいくファッションリーダーたち！ モード関係者もティーパーティを開催したり… いったいどうしてその組み合わせが？

今回は、そんな新しい紅茶にまつわるお話です。

イギリスは日本と同じく島国なので、陸続きのヨーロッパ諸国とは少し違いがあります。近隣のヨーロッパ諸国の人々がコーヒーを飲み始めると、イギリス人は紅茶に目覚めました。その紅茶熱は広く一般的な風習となり、イギリスの家庭を訪ねれば、そこが城であれアパートであれ、着いたらまず紅茶を差し出されるような具合で！

紅茶の人気は長い間不動の地位を占めていましたが、50～60年代になると、ビートニクやモッズなどの若者が、コーヒー好きのおしゃれなヨーロッパ人たちに感化されるようになりました。「古きを捨て、新しきを得る」という、支配層に対するささやかな反抗。そして時代を経て、今度はコーヒーが、新たな支配層となったのです。

話を2008年まで早送りしましょう。現在、コーヒーは至る所にあふれています。雑踏の中を押し合いへし合いしながら、熱々の液体でいっぱいのプラスチックのカップを持って歩き、もう片方の手で携帯電話を探した経験があるではないでしょうか。でもちょっと待って！この混雑から抜け出たいのなら、そう、紅茶を飲んだほうがよいのではないのでしょうか？

こんな風に紅茶の人気は復活しつつありますが、そのイメージは一変しています。最近の紅茶は、友達と待合せをして飲むといったようなものではないようです。サディ・フロスト、アレキサンダー・マックイーン、ジミー チュウの創設者タマラ・メロンなどの豪華セレブが、それぞれのコレクションの発表に向けて、ティーパーティを開催しているのです。サディ・フロストにいたっては、招待客全員に“I love tea”とプリントした下着をプレゼント！ はるか昔ビクトリア朝時代の貴婦人たちに通じるジョークではなさそうですね…。

しかし、セレブでいっぱいのアフターヌーンティーパーティは、氷山のほんの一角。マグカップ（カップ&ソーサーでは小さすぎることに注意！）に、沸騰したてのお湯とティーバッグ、そして好みの量のミルクと砂糖 —— 紅茶は私たちにとってごくシンプルな楽しみなのです。アフターヌーンティーといって午後まで待つ必要もなく、いつでもどこでも味わうことができるものなのです！

著作者 ゴードン・アラン (Gordon Allan) は、ブリティッシュ・カウンシル (www.britishcouncil.or.jp) の英語講師です。

Copyright © British Council, All right Reserved.